

随所に登場する文学作品が、よりリアルな生活を読者に教えてくれるのも本書の魅力の一つであろう。文学作品に頼り過ぎると客観性に乏しくなるものの、本書は議論を支える多くのデータがあってこそなせる記述である。著者の緻密な調査と、それを基にした読者を惹き込む書きっぷりに感嘆させられる。

最後に、今後の展望として評者の望みを二点あげる。まず一点目は、農村の人びとの胃袋はどうであったのかを示してほしいことである。第5章で農村が変貌していく様が記述されるが、そこに生きる人びとは何で胃袋を満たしていたのか、商品作物の普及や主産地形成は、彼らにどのような影響を与えたのかだろうか。次いで二点目は、一点目をふまえて近代のさまざまな人びとの生き様を胃袋からみてみたいことである。これらは、一筋縄ではいかない課題だと思われるが、「胃袋をめぐる旅は、しばらく続くことになりそうである(p.325)」とする著者の活躍に期待したい。

(坂本優紀)

【付記】

本執筆にあたり、筑波大学大学院生の伊藤大生さん、梅澤 智さん、定行祐李さん、周 月さん、張 碩さん、豊田紘子さんとの議論を参考にいたしました。お礼申し上げます。

2019年3月に胃袋の現代版となる『7袋のポテトチップス一食べるを語る、胃袋の戦後史』が上梓されました。

田和正孝 (2019)：『石干見の文化誌－遺産化する伝統漁法』 昭和堂、2019年1月刊、288p., 4,800円 (税別)。

本書は沿岸部に石などを積み、潮の満ち引きを利用して魚を獲る伝統的な定置漁具である石干見

に関する研究書である。石干見は世界各地の干潟地帯やサンゴ礁地帯に分布し、日本では山口県の瀬戸内海側から北・西九州一帯、鹿児島県の離島部や南西諸島に分布していた。しかし現在の日本では多くの石干見が消失している。多くの読者にとって、石干見は見聞きしたことのないもので、マニアックな漁法の記録と思われるかもしれない。他方、歴史の表舞台に出にくいものの、当該地域の沿岸部の少なからぬ面積を占有し、地域の自然環境や文化を語る上で無視できない存在であると思われる。こうした特定のモノへの注目が、いかにして地理学的な研究へと昇華されるのか。単なるマニアックな“趣味”とみるのではなく、石干見を通じて地理学的に何を語らしめるのかといったことに注目して拙評を展開していきたい。

本書は3部10章の本論と、石干見というマイナーな構造物を研究対象として取り上げる意義と展望について記された「はじめに」と「おわりに」から構成されている。「はじめに」では、本書で取り組まれた研究の意義と指針が示されている。魚群を追う漁船漁業を「アタック型」、魚が入る石干見漁業を「レシーブ型」という表現は、バレーボール選手であった著者の遊び心であろうか。また約30年にわたってコツコツと調査を重ねてきた著者の粘り強さを、何事にも飽きっぽい評者は本書を評する前に見習わねばならない。以下、自身の研究能力・姿勢は一旦、棚上げして本論を紹介していきたい。

第一部に配された第1～5章では、研究動向の整理と、日本の事例研究が取り組まれている。第1章では、地域貢献やツーリズムの装置として社会的に注目されつつある石干見に関する研究動向が整理されている。石干見に関する研究は海洋人類学や人文地理学、民俗学で取り組まれてきたものの、1970年代に一旦終息した。その後、1990年代より文化的景観の考え方に基づく景観の評価

といった考え方などの定着と連動する再び組み込まれるようになってきたとされている。

第2章では、前章での研究動向の整理を踏まえて、研究対象としての石干見の展望について、①石干見漁業の歴史に関する研究、②石干見の名称をめぐる研究、③石干見資料のデータベース化、④石干見の漁業活動に関する研究、⑤石干見の保存・再生・活用に関する研究と、五つに大別して検討している。とくに⑤について、石干見の保全をめぐる機運が高まるなかで人文地理学の立場からの関わり方に関する著者の見解が示されている。著者の言葉を借りると人文地理学者は地域の人々のように長きに渡って、石干見を修築したり保全に携わることはできないし、自然科学者のように生物の生息状況や観察・測定する能力も方法も持ち合わせていない。こうしたなかで人文地理学者としての地域との関わり方の一つのあり方を提示している。

第3章では、地域によって異なる石干見の呼称が検討されている。石干見の呼称としては、北九州の周防灘沿岸地域のイシヒビ系と、長崎県から熊本県、鹿児島県など西九州から南九州西部一帯のスクイ系、奄美群島から沖縄諸島、宮古列島、八重山列島のカキ系の3系統がみられることを明らかにした。また行政用語としては石干見が使用されているが、佐賀県では、1956年度の第二次漁業権切り替え時に、「漁業種類から削除」され、石干見の名称が地方の水産行政機構や漁業従事者の記憶から消えてゆくことになったという指摘は、構造物としての石干見やその漁獲機能は変わらないものの、時代や地域の状況に応じて石干見の役割がいかようにも変わることを示しており興味深い。

第4章では、スクイと呼称される島原半島を事例に18世紀初めから現在までの時代ごとの漁具数の変化や、石干見の利用と所有、漁獲物の流

通ルートや分配について、文書資料や自治体史(誌)、聞き取り調査で得られたデータをもとに検討している。副業的に利用される傾向にあったスクイは、有明海の干拓事業やノリ養殖漁業の発展にともなう漁場喪失によって減少していった。スクイが減少するなか、高来町のスクイが町の文化財に指定され、現在も利用されているなかで動態保存され、県の指定文化財へ「格上げ」する準備が進められているという。著者は文化遺産としての検討を進めるうえで、石干見の利用形態や所有関係、利用慣行を考察することに加えて、漁業資料の掘り起こしを必要と指摘している。

第5章では、大量の漁獲を見込める形状とは異なり、沖側に魚の逃げるスペースを設けた「開口型の石干見」の形態や、使用される補助漁具、漁獲対象などについて九州北部や奄美群島、沖縄県の事例に検討している。依拠する資料は自治体史(誌)や民族誌、聞き取り調査となっている。このなかで「現役」として利用されていた過去の石干見を示す写真として、50年以上前に藪内芳彦氏や杉本尚次氏といった先達の撮影したものが効果的に使用されている。こうした写真の活用は、既往研究の目配りや周囲の研究者の活動に対する学問的興味があって可能になるものであろう。自身の研究や日常業務に埋没しがちな評者に欠けている研究姿勢である。

第6～8章の第2部では、台湾における石滬(*chloh-ho*: 台湾での呼称)の研究動向と事例研究が記されている。第6章では、石滬の研究史が日本統治時代と、1945～1980年代までの空白期を挟んで1990年代以降の時期に大分して整理されている。前者については、日本から派遣された囑託研究員による漁業経済・社会に関する報告書や記事中に含まれる石滬に関する記録がメインとなり、後者では陳憲明氏、顔秀玲氏が行った澎湖列島での漁業地理学的研究を嚆矢として台湾人研究

者による本格的な研究が蓄積されてきた。とくに1990年代に研究が進められた推進力の一つに台湾における「在地文化」の見直しといったナショナルスケールの社会情勢と連動し、近年ではジオパークとの関連もみられるという。文化的景観にしる、ジオパークにしる、地域振興や地域の活性化と関わりをもつ地域の事象を研究対象として取り上げる際に、ポリティカルな動向も無視できないことを示唆している。

第7章では、1910年代の台湾本島における石滬漁業の動向を「台湾総督府文書」に含まれる漁業権申請資料の分析を中心としている。台湾本島では、地域によって石滬の所有形態が異なるものの、概ね主たる生業として農業を営みながら自家消費用の「おかずとり」として石滬が利用されていたことを示している。一方、著者は聞き取り調査からは「戦前期には、一基を7人で利用すれば、生活が十分できた」という言明を得ており、こうした矛盾点の解消が課題になるとしている。課題の解消については、聞き取りで得られた言説に至るプロセスを紡ぎ出すことが方法の一つとして考えられるが、資料的制約や情報提供者の探索などハードルが高く、歴史地理学的研究の難しさを看取できる。

第8章では、前章と同様に「台湾総督府文書十五年保存公文類纂」の1913（大正3）年から1915（大正5）年中に含まれる石滬漁業権免許申請に関する記録をもとに、澎湖列島の北部にある白沙島とその周辺島嶼部の集落毎における石滬の所有状況を分析している。概して「おかずとり」と理解されていた石滬であるが、澎湖列島においては、地形や季節風といった自然条件に応じて、石滬による大量の漁獲が見込める集落もあり、石滬を主たる生計の維持手段に据えている事例が示されている。また第7・8章は、著者がこれまで共時的な分析に軸足をおき、通時的な分析を軽視

してきたという課題を克服するための新たな試みに位置付けられている。

第9・10章から構成される第3部では、これまでの検討を踏まえた今後の研究課題が展望されている。第9章では、石干見をめぐる世界的動向について検討されている。これまでの歴史的・文化誌的研究に加えて考古学的研究の成果をベースに文化遺産として考える立場が表れてきた様子を、南アフリカ共和国とイギリス、フランスにおける近年の研究成果を概観している。南アフリカ共和国における研究紹介のなかで、「現在も操業を続けている漁業者の知識がなければ文化遺産としての石干見は消滅してゆく。しかし漁業者に何らかの補償なくして維持管理もたちゆかない」という状況は、日本の文化財保護行政においても同様の問題がみられるといえる。また、評者の不勉強に起因して、ユネスコでの石干見を水中文化遺産として保護・保全していくべきか議論されている点については驚いた。石干見に対する日本での認知度と世界的な注目度に乖離がみられるが、もし日本が水中文化遺産保護条約に批准し、石干見を保全の対象とした場合には、著者はその活動の中心的役割を担うことになるであろう。

第10章では、これまでの検討を踏まえて今後取り組むべき課題を①「石干見の地域文化誌」の構築、②石干見を再生・活用する活動の考察、③石干見漁業活動の生態学的理解の3点について具体的事例を盛り込みながらまとめている。①については、未だ埋もれたままになっている文書資料の収集と分析による過去の記録に補足すること、②については石干見を文化遺産として捉える「地域の人々」が増えるなかで、「地域の人々」と協力しながら発言したり、団体の活動を記録したり、研究者としての自らの立ち位置を考える作業とされている。③については、石干見を通じた人間-環境関係のマクロ、ミクロな研究である。マ

クロナ視点からは裾礁やラグーンの発達する沖縄などを事例に、沿岸部からのサンゴ礁の発達状況と石干見の分布域の関係の考察、使用される石材の分布域などが挙げられ、ミクロナ視点からは、複合的生業のなかでの石干見漁業の果たす役割の検討や、漁業活動の時間的な利用形態や漁獲量、漁獲物の分配などの分析が挙げられている。そして最後に、これらの研究課題群が模式図を用いて整理され、締めくくられている。

これまで評者の私見を含めて内容を簡単に紹介してきたが、読了後の率直な感想は著者の地域に対する誠実な姿勢があって可能となった研究と感じた。以前、評者を含めた教え子らが著者とともに「最後のスクイ」の見学と、動態保存に携わる漁業者を訪問する機会を得た。その時にも感じたことだが、著者は成果を次々と世に発信する「アタック」型の研究者である一方、フィールドを単にデータ取得の場としない「レシーブ」型の姿勢に基づく絶妙な関係である。基礎研究に軸足を置いた多くのフィールドワーカーは、地域の方々と関係が密になるほど、懇意にしてもらっている自分と、論文を書くための自分との間のなかで、自身の立ち位置のとり方に悩む。おそらく著者も、常に迷いながら関わっていることと想像されるが、経験不足の評者らからすると、現時点で考える地域とのベストな関係性を、本書を通じても感じ取れた。一点、経験不足の評者から、教えを請いたい点として、人文地理学者として地域の方々へどのような貢献方法があるのかといった点を挙げる。著者は、石干見の保全活動の支援やコーディネイトを挙げているが、これは著者の人柄に合った「寄り添い方」にも読み取れた。つまり、他分野の研究であっても可能となる方法とも考えらえる。本書を通じて、人文地理学ないし地理学ならではのアウトリーチ・アクションリサーチの方法に関する見解の提示があっても良かった

かもしれない。ただし、他分野に埋没しない地理学からのアウトリーチ・アクションリサーチの独自性については、著者だけに課されることではなく、全ての地理学者が考えるべき段階にきているともいえる。評者を含めて学界全体で考えるべきことであろう。

以上、評者の雑感を含めてまとまりのないものとなったが、本書は特定のモノを詳細に紹介することにとどまらない地理学的研究の深みに触れることができる重厚な研究書といえる。ジオパークや伝統的文化など特定のモノや事象を事例とした博士論文を執筆しようとする院生にも参考になると考えらえる。「漁業のことだから」と食わず嫌いをせず、枠組みに注目して読んでみると新たな発見を得られる一著であろう。蛇足であるが、本書は著者の「石垣マニア」に端を発した研究と思われる。日常生活上の興味・楽しみを研究に引き上げられるのも地理学の魅力の一つであろう。

(吉田国光)

フィル・ハバード、ロブ・キチン、ブレンダン・バートレイ、ダンカン・フラー著 山本正三・菅野峰明訳：『現代人文地理学の理論と実践—世界を読み解く地理学的思考』明石書店、2018年11月刊、412p., 5,800円（税別）

この度、山本正三・菅野峰明両氏による『Thinking Geographically: Space, Theory and Contemporary Human Geography』（Hubbard et al. 2002）の訳書が出版された。本書は元来学部生向けの教科書である。しかして教科書であることは内容の簡易凡庸なることと同義ではない。かつて五経や聖書の如き難読の典籍が初等教育に用いられたと同じく、本書が教科書である所以は学術的思弁の基礎を初学者に伝えんと欲する点にあ